

元気を出しなさい

2023年6月18日

使徒の働き 27章1～26節

序：ローマ行き ①19・21 エルサレムに行ってからローマをも見なければならない
(パウロ)

②23・11 エルサレムで証したようにローマでも証しをしなければならない
(主)

弁明

エルサレム → → → → → カイサリア

①エルサレムの民衆 (22章)

②ユダヤ議会 (23章)

③総督フェリクス (24章)

④総督フェストウス (25章)

⑤アグリッパ王 (26章)

パウロは無罪、しかし皇帝に上訴 (ローマ市民権)、ローマに護送

I. ローマへの旅に出発

(1)距離 海路 2700km + 陸路 180km 長い難儀な旅

(2)護送責任者 皇帝の親衛隊に所属するユリウス

(3)同行者 ルカ 「私たち」 21・18以来 (私たちを連れてヤコブ訪問…)
アリスタルコ (テサロニケのマケドニア人・忠実な同労者・共に投獄)
数人のほかの囚人

(4)道程

カイサリア出発 → シドンに寄港 → ミラ寄港 →
アドラミティオの船 教友との交わり許可 船を乗換え
イタリア行きのアレクサンドリアの船
穀物貨物船(37節)
276人

～向かい風のため進みは遅い～→クレタ島の良い港寄港
近くにラサヤの町

II. 今後の航海について意見の対立

(1)パウロ：断食の季節 (9月末～10月初め) を過ぎ

航海完全閉鎖 (11/11～3/5)

海上の嵐など不穏・危険な時期 (～5/15、9/14～)

パウロは海難にあった体験を踏まえて発言 (囚人だったが)

積荷、船体、人命に大きな危害と損失が出る ⇒ 続航は見直す

(2) (船長+船主) ⇒ 百人隊長

航海は続けられる

(3)大多数：もっと冬を過ごすのに便利な同じクレタ島のフェニクスまで行く

①決定

②穏やかな南風で航行開始

③ユーラクロン襲来

III. 海上の嵐の中で

(1)できうる人間的努力

- ①曳いていた小舟を船上に引き上げた（海水が入って重い）
- ②綱で船体を巻いて補強
- ③浅瀬に乗り上げる危険を回避するため、船具を降ろし流されるままに
- ④積荷、船具を捨てて、船を軽くする

(2)乗船者の状況、

- ①疲労こんぱい、不安、絶望、事態は悪化
太陽も星も見えない＝方角、時間が不明
暴風雨の勢いに難破の恐れ、不安と恐怖、助からないという絶望感
食事が摂れない
- ②パウロ立つ
勧め、励まし、証し

Ⅳ. 神の人パウロ

- (1)忠告を聞き入れなかったことが原因で起きた災難だということを想起させる
責めないが、事実を伝え、現状を把握するよう助ける

- (2)激励：元気を出しなさい（22、25）

- (3)宣言；だれもいのちを失わない だが船体は失われる

(4)根拠：①神のことば

パウロへのねんごろな主の語りかけ

私の主、私が仕えている神が御使いを通して語られた

「恐れるな、パウロ」＝パウロも恐れていたことをご存じ、名を呼ぶ

「あなたは必ずカエサルの前に立ちます」＝約束は変わらない

「同船している人全員をあなたに与える」

②パウロの神への信仰（信頼）

私に語られたことはその通りになる

そう信じる信仰も神が与えてくださった（神の賜物）

必ず、どこかの島に打ち上げられる

Ⅴ. 結び

- (1)不安と死の恐怖に慄く人に、希望と励ましを与えるのは、神のことば（約束）
それを伝えるのは神から遣わされた信仰者（クリスチャン）

- (2)人間発の希望や解決の方法、すさまじい努力が無力となる時が神の出番
主はその時を待って働かれる

- (3)キリスト者、教会の祈りと奉仕に周囲の人々の永遠がかかっている
人間的に困難、絶望しかないときこそ、主ご自身のご計画が明らかにされ、主が
私たちを通してそれを成し遂げられる
私たち個人、クリスチャンホーム、教会の存在の意味は大きい
例：マーティン・ルーサー・キング牧師

- (4)その神は私の主であり。私が仕えている神
自分の能力とか状況の善し悪しではなく、主のみこころか否かが大事

- (5)専門家や知識人の言うことや多数決が必ずしも正しいとは限らない
岐路に立つとき、人の意見や計画以上にそれが主から出たものかどうかを祈り
確かめ判断せよ